

"SHOJO" I-NARRATIVES



「センチメンタルな旅」

荒木経惟 (自費出版/1971)

妻・陽子と訪れた京都、福岡への新婚旅行を、叙情的に、そして赤襟々に纏った名作写真集。妻の顔差しは写真家と共犯関係にあるといわれるほどに、二人の世界は強固だ。虚と実を行き来するアラウキーの原点。

「OMIAI」

澤田知子

(青幻舎/2005)

お見合い写真を題材に、澤田知子が30人の女性に扮したセルフポートレート集。年齢も職業も性格もばらばらの女性たちは、観る人によって、また日本と海外でも、写真の読みかたが異なりそうだ。



「School Days」

澤田知子 (青幻舎/2006)

女子校のクラス写真をコンセプトに、学生全員さらに先生役までも澤田知子になりきり、10校分のシリーズを作り上げた。同じ制服なのに、一人として同じ生徒はいない。見るほどに、その厳密さに驚く。



「The Ballad of Sexual Dependency (性的依存のバラード)」

Nan Goldin (Aperture/1987)

ドラッグ、暴力、性的抑圧に囲まれた写真家と友人たちの日々を光景を写し出し、社会に衝撃を与えた1冊。街のないストレートなスナップ写真が、当時のどんな写真よりも鋭舌に人々に語りかけることになった。



「少女」私・物語

ラセット・リーダーマン＝文 Text: Russet Lederman Translation: Kenichi Eguchi

1971年、荒木経惟は妻・陽子との新婚旅行を記録した写真集『センチメンタルな旅』を出版した。それまでの、家族写真はアマチュアのものだという固定観念を裏切るように、新婚の妻を主題としたパーソナルな物語であった。ここにある写真に荒木の姿はないが、分ち難い存在感がある。荒木が写真を撮る間、陽子は彼を見ている。そのことが被写体と写真家、写真と個人の関係を決定づける。写真集に添えられた文章も、このパーソナルで日記的な写真を、自身が「私小説」と呼ぶ自己探求の手段だとしている。

「センチメンタルな旅」で見せたこの私写真、そして西洋から見ると性の品位を翻弄するような緊縛された女の写真によって、荒木は性差別的な扇動者でありながら芸術的な解放者という矛盾する立場に置かれる。荒木の自己探求型私小説的な感性とセックスにあふれた写真は、アメリカ人写真家のナン・ゴールドディンの日記的作品『性的依存のバラード』とともに、90年代から2000年代初めに台頭した日本の若手女性写真家に道を開いた。彼女たちの独特なビジュアル・ナラティブは、過去の性差別的な行動やステレオタイプを、セックスと抵抗と消費の罫を組み合わせて、かわいい「少女」[注1]の仮面に変身させながら、公と私のレベルでも疑問を投げかける。

このユーモアを仮面にした変身こそ、澤田知子の作品のテーマである。表向きはシンディ・シャーマンのRPG的な写真に似たところのある澤田の作品は、集団の総意という伝統に価値を置く社会における個人の役割に、「少女」というひねりを加えている。「OMIAI」では、自分を被写体としてデジタル処理を施し、お見合いという長く存続してきた視覚伝統に挑戦した。従来、スタジオ写真を使う見合い写真では、伝統的な衣装やモダンなドレスを着て、堅苦しいポーズをとり、将来の伴侶に売り込む。澤田知子は、そういった従順

あるいは気が進まずに撮る見合い写真のポーズを意図的に壊し、結婚への名刺代わりとなる装いに変換したアイデンティティを再提示する。

「School Days」では、学校の集合写真が、生徒も教師の顔もすべて澤田自身の顔に入れ替えられた。パブリックとプライベートな物語の狭間で揺れる女性の役割が、そこでは探求されている。女学生のステレオタイプは子どもと思春期の境界を示し、「少女」カルチャーを思わせる。澤田の視線を通したパーソナルでいてパブリックな集団の物語は、ボルノやマンガの性的幻想のテーマにもなる、従順でかわいい女学生の役割に疑問を投げかける。制服姿の澤田自身が見られることで、誇張された集団写真の性質はフェティッシュ化された性と個人の対話にも切り込んでいくのだ。

男性に消費される性の対象として、消費の仕掛けの共犯として、少女のステレオタイプの破壊は澤田のクリエイティブな抵抗だ。女性が消費対象にされてきた日本の状況の中で、澤田のような日本人アーティストがそれに抗っていくナラティブを探求するのはごく自然なことだ。だがシンディ・シャーマンが西洋で論じられるような、消費主義の仮面を被ったフェミニズムと並べる狭い読みかたではなく、荒木経惟など男性作家による、個人的で感情的な作品の根底にあるセックスと反逆という日本的な写真感性で理解される必要があるのではないか。

[注1] 「少女」とは直訳の女の子という意味ではなく、シャロン・キンゼラが「Cuties in Japan」で解説する「Kawaii」ガリー・カルチャーを参照している。
<http://www.kinsellaresearch.com/new/Cuties%20in%20Japan.pdf>

Russet Lederman / ニューヨーク在住のメディアアーティスト。写真集のコレクターでもある。スクール・オブ・ビジュアル・アーツでメディアアート理論と創作を教える。10×10フォトブック・プロジェクトにも参加し、写真集に関する執筆を行う。スミソニアン・アメリカン美術館から活動に対し、賞や助成金が贈られている。